

'16

前期日程

国語小論文問題

(教育学部)

注意事項

1. 試験開始の合図があるまで、問題冊子を開いてはいけません。
2. この冊子のページ数は五ページです。問題に落丁、乱丁、印刷不鮮明の箇所等がある場合には申し出てください。
3. 解答には黒鉛筆を使用してください。
4. 文字ははっきりと正確に記入してください。
5. 解答は解答用紙 **1** **2** の所定の欄に記入してください。
6. 受験番号と氏名を各解答用紙の所定の欄に記入してください。
7. 問題冊子のこのページにも受験番号を記入してください。
8. 退室するときは、解答用紙を **1** **2** の順に重ね、全体を裏返して、机上においてください。
9. 解答用紙を持ち帰ってはいけません。
10. 問題冊子と下書用紙は持ち帰ってください。

受験番号

次の文章を読んで、問に答えなさい(なお、出題の都合により、一部表記等を改めた)。

母親に手を引かれて歩いていた幼児が、急に道路のすみにしゃがみこんでしまう。「もう歩けないよー」。しゃがんだ場所がドリンク・スタンドの前なのは、ジュースでも飲ませろということか。大きな買い物袋を抱えた母親は、うんざりした表情で、「もうちょっと我慢しなさい」となだめている。こんな風景は、日常よく見かける。

私たちは日ごろ「我慢」という語を、「つらさをこらえて耐え忍ぶ」意味に用いている。ほとんど「辛抱」と同じ意味である。

ところが、こうした用法が定着するのは、江戸時代も後期になってからのことらしい。江戸初期(一六〇三年)に刊行された『日葡辞書』に、「我慢の心を発す」とは、「強く自負する、あるいは、慢心し高ぶる」こととある。実は、これが「我慢」の本来の意味、「我慢」は仏語なのだ。

「我慢」は、サンスクリット語 *asmi-mana* の意識である。その定義は、『成唯識論』巻四に記される。「我慢とは、踞傲を謂う。執する所の我を恃み、心をして高く挙がらしむ、故に我慢と名づく」。要するに自分の力を過信して、思い上がることという。「慢」*mana* は、根本煩惱の一つで、「我慢」は「増上慢」などとともに、七種の「慢」の中に数えられる。『法華経』方便品で世尊の説く偈に、「比丘・比丘尼にして、増上慢を懐くものあり。優婆塞の我慢なる、優婆夷の不信なる」などであるのは、まさにその意味にほかならない。

『今昔物語集』巻一には、釈迦の修行時代の説話が多く収められる。その一つ、山中での苦行の話では、師匠が若い釈迦に教えを説いていった。

「衆生ノ始ハ冥ヨリ我慢ヲ発ス。我慢ヨリ痴心ヲ生ズ。痴心ヨリ染愛ヲ生ズ。云々」

すなわち「我慢」がもろもろの煩惱の出発点に位置づけられている。

イソップ物語を訳した一七世紀の『伊曾保物語』にも、「我慢」が出てくる。「狼といのししの事」という話である。

いのししの子どもが数多くいる中に、とりわけ小さないのししの子が、「我慢」の心をおこして、「仲間の頭になってやろう」

と考えた。だが、齒を食いしぼり、目を怒らせて威嚇してみても、誰からも相手にされない。そこで、羊の群に入って、同じようにふるまってみると、羊どもはみな恐れをなして、逃げたり隠れたりした。してやったりと得意顔のところへ、一匹の狼が走ってきた。「自分はここの主あまじだから、あいつもきつと恐れるだろう」と知らぬふりをしていると、狼はさっといのししに飛びかかって、山中に引きずっていった。子分のはずの羊たちは全く助けようとしない。わめき叫んでいると、その声を聞きつけたいのししの仲間たちが押し寄せて、危ういところを救出された。その教訓は――

「そのごとく、人の世にある事も、よしなき慢気をおこして、ひとを従へたく思はば、かへつてわざはひを招くものなり」
いったん「我慢」の心をおこせば、あくまで意地を張ってそれを守ろうとする。そこに、「忍耐」や「強情」などと結びつく機縁が生まれる。夏目漱石の『こころ』（一九一四年）には、そうした用例が見えている。

「先生」の遺書で、昔の友人Kの性格を述べたくだりに、「彼は我慢と忍耐の区別を了解してゐないやうに思はれたのです」（七八）とあり、また「其上そのうえ彼には現代人の有もたない強情と我慢がありました」（九七）とある。この「我慢」はすでに現代語の「我慢」だが、「忍耐」や「強情」と比べられることによつて、原義「我慢」の痕跡を留めている。

もっと分かりやすい例なら、古今亭志ん生口演の落語「強情しやうじやう灸きゅう」がある。さる強情な男、友人が灸をすえてきたと話すのを聞いて、負けん気を起こし、山のようなモグサを腕に乗せて火をつけた。はじめは「なんだ、こんなもの。石川五右衛門て人は、釜ん中イ油がぐらぐら煮え立つてる中へとびこんで、にこつと笑つて辞世を詠んでるよ」などと大口をたたいていたが、猛烈な熱さについて我慢できなくなり、モグサを払い落とすと、「石川五右衛門も、さぞ熱かつたらうなア」。

友人が灸をすえる段には、こんなせりふも入る。「待つてるところイすえる野郎が出てきやがつて、このお灸はお熱うございますけども、からだのためになりますから、どうか我慢なすつてくださいッて……なんだ、我慢たつて灸たらう、なにいつてやんでエ、背中でたき火でもしやアしめえし……」。

まことに強情と我慢は縁続きの関係にある。

問1 「強情」と「我慢」と「忍耐」の関係について述べなさい。(五〇〇字以内)

問2 「我慢」のように、本義から意味が変化した語を挙げ、考察しなさい。但し、例示する語は漢語でなくてもかまわない。

(三〇〇字以内)

次の文章を読んで、問に答えなさい。

小論文という言葉が広まっている。だが、そのわりに多くの人が、小論文を一部の大学受験にしか関係のないものと思っているのではなからうか。

私は、小論文というものを、これから多くの人に書いてほしいと考えている。「小論文」と呼ぶから難しそうに聞こえるが、要するに、小論文というのは「意見文」だ。仕事に就いた後、大学に入った後、レポート、報告書、企画書という形で書かれる文章は、基本的に小論文の変形なのだ。そして、新聞の投書欄に出る投書、インターネット上での主張。あれも立派な小論文だ。

要するに、大人になってから人前に提出するために書く(あるいは、書かされる)文章は、役所に出す書類を除けば、そのほとんどは、小論文なのだ。

誰しも、政治や経済、教育、人生について、現代社会について、現代の流行について、意見を持つ。なぜ、そんなものが流行するのかを考えてみる。流行を否定したくなる。時には肩を持ちたくなる。それを書くのが小論文だ。つまり、自分の意見を語り、背景にある状況を考える、それが小論文と言っていいたいだろう。

(樋口裕一『ホンモノの文章力』集英社新書 二〇〇〇)

問 課題文の小論文の捉え方について、あなたはどのような意見を持つか。小論文の学習を通して、あなたはどのような力身につけたと思うかに触れながら、考えを述べなさい。(六〇〇字以内)